

藤並の森

Vol.23

高知県立文学館



●「暁のセーリング（中土佐町久礼漁港）」（写真提供／八井田晋）

リレー随筆㉓ 寺田寅彦について —— 中村 稔

「富を積んで絵を書き度と君が云はれると同様に僕等も働かないで研究がしたいと願つて居るのですが実際にはどうでしようか腹がはると眠くなるのは生理的の現象であると同様に貧乏であるといふ事は傑作の一つの条件かも知れない例外もあるが官位勲等が上つて金が取れ出すと大抵の学者も駄目になるよう芸術の方も金で魔醉してしまう恐はありませんかしかし金持になつてすきな繪をかいて居るのは悪くないですな」

青楓をたしなめながら屈折した心情と共感を吐露した、この書簡は彼の人柄を偲ばせて深甚な興趣がある。

いittai 土佐は、古くは五山文学の双璧、義堂周信、絶海中津、近くは植木枝盛、中江兆民、幸徳秋水、馬場辰猪、大原富枝、安岡章太郎等、傑出した思想家、文学者を数多く生んでいるが、私がとりわけ人柄に心惹かれるの

最近青土社から刊行された『愛の手紙・友人師弟篇』に寺田寅彦の津田青楓宛正七年三月三日付書簡が收められている。青楓から寅彦に贈られた「先生読書の図」に対し、寅彦が「小生は傑作だと信じて居ます」などと記した札状だが、「先生読書の図」は現在日本近代文学館が絵葉書として来館者にお預けしている「漱石山房閑居読書図」と同じ趣向のものらしい。私はこの絵葉書が好きで、始終買い求めて使っているが、石崎等さんは、この書簡について「漱石・青楓・寅彦」という師弟の高雅な精神が交響していると解説している。書簡中、寅彦は次のような感想を述べている。

「自分の中にいる極端なエゴイストに言わせれば、自分にとつては先生が俳句がうまかろうが、まづかろうが、英文学に通じていようがいまいが、そんな事はどうでもよかつた。いわんや先生が大文豪になろうがなるまいが、そんなことは問題にならなかつた。むしろ先生がいつまでも名もないただの学校の先生であつてくれたほうがよかつたのではないかというような気がする。先生が大家にならなかつたら少なくとももつと長生きをされたであろうという気がするのである」

これは漱石の寅彦に対する友情にこたえるふさわしい文章だが、師弟間の眞の友情といいものはこういうものに違ひあるまい。私は寅彦のこうした真率さが好きなのである。

（日本近代文学館理事長・詩人）

は寺田寅彦である。高知県立文学館の寺田寅彦記念室に展示されている漱石の寅彦宛明治四十五年五月二十七日付書簡は、漱石が寅彦にその書を贈ったときの送り状であり、漱石の寅彦に対するこまやかな友情とユーモアにあふれた、漱石の肉声を聞くかの感がある、すぐれた書簡だが、寅彦はこの書について「夏目漱石先生の追憶」中、「自分はいつでも書いてもらえるような気がしてついつい絵も書も一枚ももらわないでいたら いつか先生からわざわざ手紙を添えて絹本に漢詩を書いたのを贈られた」と記している。ただ、寅彦はこの隨筆を次のように続けている。

◆企画展紹介◆

2004年1月2日(金)～2月1日(日)

「良寛展—詩と書とその生涯—」

良寛(一七五八～一八三二)は、江戸後期の禪僧です。手毬やおはじきを懐に子どもたちと遊び、歌を詠み、書にもすぐれていました。その清貧の生涯は、今も多くの人を魅了しています。

良寛は、物質的な貧しさの中に身を置きながら、万葉調の清新な和歌や近代的ともいえる長歌、中国宋時代を彷彿とさせる漢詩や良寛独特の魅力を持つ書など、豊かな表現世界を作り上げました。本展では、新潟に残されている良寛の遺墨による詩歌や漢詩、書簡、相馬御風や安田駿彦ら良寛を慕った追慕者の書や絵画作品、写真家・弓納持福夫氏の良寛ゆかりの地の写真パネルなど約五十点により良寛の軌跡を紹介いたします。

■良寛の時代

良寛は、一七五八(宝暦八年)、越後(新潟)三島郡出雲崎の旧家橋屋の長男として生まれました。

良寛が生きた時代は、幕藩体制が疲弊の色を見せはじめ、それに追い打ちをかけるように天災や異国船の来航などが重なり、永くつづいた太平の世が動搖する不安の時代でした。

江戸も後期となると、強力な経済力に裏付けられた商人階層の権力は、日本の社会にとって大きな影響を与えるようになります。幕府は、農民と武士を救うため懸命の改革を行いますが、体制を回復させる力は残っていませんでした。良寛の少年時代は宝暦の田沼時代にあたり、出家・修行時代は松平定信の寛政の改革時代と重なっています。

■大愚良寛

この突然の出家の謎は解けていません。背景には十五歳の時の一七七二(安永元)年以降続いた天災に苦しめられる

■名主の昼行灯

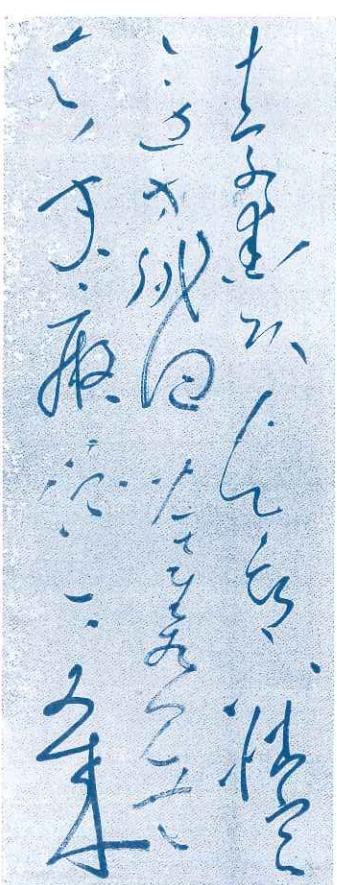
橋屋・山本家は代々出雲崎の名主役をつとめてきた家系で、町をとりまとめて佐渡に往来する役人の世話や、犯罪や訴訟にも当たっていました。



「空中習字(木彫)」茂木弘次／作

良寛は、八歳で地元の光照寺の寺子屋に通い、十三歳から十八歳までは、隣町の地蔵堂に塾をひらいた北越四大儒者の一人・大森子陽に学んでいます。十五歳で元服した良寛は、十八歳の時、名主見習役となります。

学問の世界から一転、慣れない実務に追われるようになった良寛は「名主の昼行灯」と評され、その手腕は芳しいものではなかつたようです。そして一年もしないうちに弟の由之に名主役を譲り、良寛は曹洞宗光照寺住職・玄乘破了のもとに入り剃髪、参禅三昧の日々を送るようになります。



「貼交六曲屏風
(左隻)」より
〔漢詩〕

十字街頭食を乞い入り
八幡宮辺方に徘徊す。
児童相見て共に相語る。
去年の癡僧今又來たると。

人々の見聞、新興勢力との確執による本家の衰運の予兆、失恋あるいは婚儀の不成立、名主役として立ち会つた凄惨な処刑に耐えられなかつたことなどが伝えられています。

名主役を捨て剃髪した良寛の立場は曖昧なものでしたが、玄乗破了の師・国仙和尚が新潟に立ち寄つた際、得度を受け、國仙和尚について、備中(岡山)玉島の円通寺へ赴くことになります。一七七九年(安永八年)、二十二歳のことでした。円通寺での良寛の修行は猛烈なものであり、また、諸国に名僧を訪ね禪の真理を尋ねたことが伝えられています。

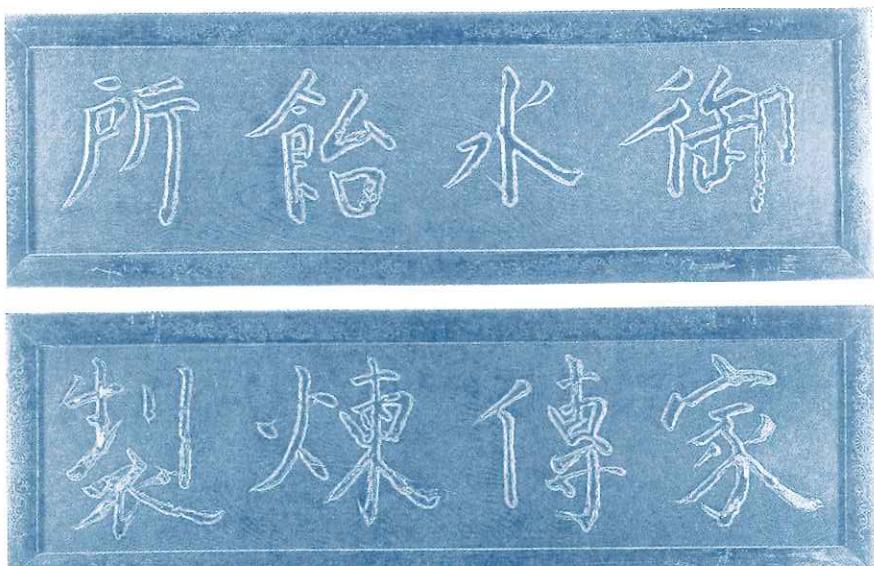
一七九〇年(寛政二年)、三十三歳の時、國仙和尚より印可の偈を受けます。「良や恩のごとく道転寛し」(偈の一句目)により大愚良寛が誕生した時でした。

その後、病床に伏した國仙和尚は翌年死去、三十四歳の良寛は円通寺を後にします。後の漢詩に詠まれた円通寺の仙桂和尚のように、座禅もせずに経も読まず、ただひすら下働きをしていた態度こそ真の僧侶の姿ではないかと、修行の内容を問い合わせていたこともあります。西国行脚に旅立つたのでした。それは足かけ六年間にもわたる行脚でした。

この間の良寛の消息はほとんど不明ですが、土佐滞在と思われる時の様子のみが近藤万丈『寝覚の友』と解良栄重『良寛禪師奇話』に記されています。万丈が若い頃、土佐の旅で城下三里のところで雨にあい、庵を見つけ宿を借りますが、庵の瘦せて青白い顔をした僧は最初に一言いつただけ。僧なのに座禅も念仏もしない。庵には木仏が一体、「莊子」が二冊あるばかり。本に挟んであった草書の見事さに揮毫を頼むと応じ「越州の産了寛書す」と記した、というエピソードです。

道元の禪から離れ、自然に遊び、「無用」の用に価値を見いだす隠棲者の姿であり、越後に帰つた良寛が托鉢をする以外は隠棲を貫く生活を行つたことを考えあわせるとその原型ともいえる姿が伝えられている記録です。

■西国行脚—土佐の「了寛」



「鈴屋看板自寶畫刻字」新潟市寄託 新潟市有形文化財

哀しい出来事が続きました。

五十歳前後の良寛は地域の住民と安定した関係を結んでいたらしく、人々は托鉢中の良寛に雨宿りの部屋を貸したり、風呂をつかわせたり、濡れた着物の替えを提供したり、といったことが伝えられています。良寛は里の人々と一定の距離を保ちながら、長く托鉢に出れば気ままに空庵や旧知の人の家に泊まり、詩をつくり話を聞き、また托鉢に出る「雲遊當無く」というスタイルをとっています。

■文人との交わり

五合庵にいた時代の良寛は、越後や江
戸の文人と交流して、ます。

一八一一年（良寛五十四歳）、
橋峯『北越奇談』が江戸で出版され、

越後の学者・鈴木文台は、十八歳の時の『喫煙詩話』で、ただ鉢一つで生活し、子供と手毬で遊び、蚤シラミを友とし、壁に詩を貼り、草書を善くし、詩は詩経を基とする、当時の良寛の人物像を

蜀記行

「四國紀行」阿部定珍



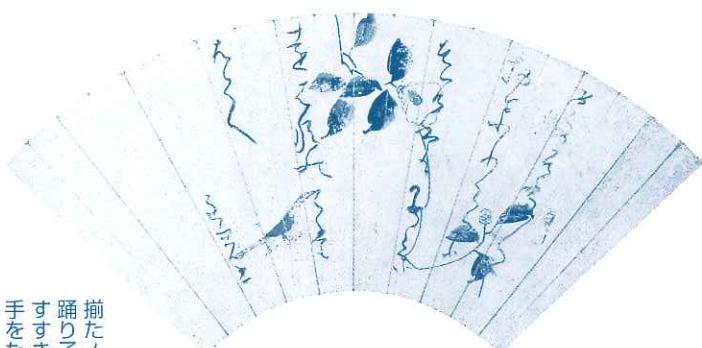
■最後の良寛と貞心尼

の二カ所に定珍の墓があります。

一八一六（文化一三）年、良寛は乙子

何日も帰らないことがあつたそつです。翌年秋に、木村家にいる良寛を三十歳の貞心尼が訪ねます。二人は夜を徹して歌と話のやりとりをし、貞心尼は数日のあいだ木村家に泊まりながら良寛と交流を重ねたと伝えられます。良寛も若い尼僧の才能を気に入り、二人の交流は良寛の死まで続きました。

踊り子が踊た
すき尾花の
手をたたく



「貼交六曲屏風(右隻)」より《俗謡》
良寛の里美術館蔵

五合庵時代に一番交際があつた人物は國上山のそばの渡辺の庄屋・阿部定珍でした。心友であり、また、生活の支援者でもありました。この頃良寛は定珍から万葉集を借り詮釈を始めています。良寛の手紙では定珍宛の礼状が多く伝えられていて、現在、阿部家所蔵の良寛遺墨は国の重要文化財に指定されています。

寛詩集を「草堂集」として出版した
いとのぞみ、良寛とも長く交流を続けた
学者でした。

の自賞の人物像を
「一世の人これを名づけて愚とし賢
とし痴とし有道としその名紛紜たり
」と、記しました。後に文台は、直

越後の学者・鈴木文台は、十八歳の時の『喫烟詩話』で、ただ鉢一つで生活し、子供と手毬で遊び、蚤シラミを友とし、壁に詩を貼り、草書を善くし、詩は詩経を基とする、当時の良観の人物と

した。第六巻人物其の三に良寛を紹介し、「実に近世の道僧なるべし」と記されています。江戸で、良寛の名が自然と伝えられた始まりでした。また、江戸の儒者・亀田鵬斎が越後の弟子へその講義に来たとき、良寛を訪ね交説したことにより、良寛の名も自然と江戸でも知られるようになったとも言われています。良寛と鵬斎の交流は、その後も折にふれ長く続きまし

した。第六巻人物其の三に良寛を紹

◆次回企画展紹介◆

2004年2月11日(水)～3月21日(日)

「文学・青春」展

高知県立文学館では、日本近代文学館の協力をいただきまして、「文学・青春」展を開催いたします。今回の企画展は、第一部 愛と性、第二部 思想と社会、第三部 戰争と青春、第四部 青春彷徨の4部構成となっています。

それでは、ここで、開催にあたっての（財）日本近代文学館の中村稔先生のご挨拶文から企画展の紹介をさせていただきます。

「青春は夢と彷徨の季節である。未熟な魂が、自らを錯覚し、異性との愛に溺れ、惑い、野望に燃え、また野望の潰え去るのを見、失意と挫折をくりかえす、そういう時期であり、そういう魂の状態である。青春はまた、私たちの人生において精神の最も緊張し、高揚する時期であり、眩しく、輝かしく、また後日になって悔恨と哀惜をもつてふりかえる時期である。だが、誰一人同じ青春を体験するもの

はない。社会状況の違いにより、家庭環境の違いにより、また個性の違いにより、それぞれが青春体験をする。青春体験はまことに多様性に富んでいる。しかも、青春なくして私たちの生はない。青春は私たちの生にとつてかけがえのない季節であり、青春を問うことは私たちの生を問うこととひとしい。

昭和という激動の時代。大正デモクラシーの残照の中で、大陸における戦争が泥沼化し、思想、表現の自由が抑圧され、戦争が苛烈化し、やがて敗戦を迎えた、焦土の中で戦後民主主義が唱えられ、朝鮮戦争と冷戦、経済の高度成長の間に、家族の崩壊がすすみ、個人が孤立化していく時代。この過酷な時代に、

文学にとって青春とは何であったか、青春にとって文学とは何であったか。この時代に、傑出した文学者たちは、いかに彼らの青春を生き、いかに彼らの青春を描いたか。

この展開は1920年代以降の多様で豊饒な文学的業績の展開の跡を辿ることによって文学と青春の関係をさぐり、青春の意味を、さらに私たちの生の意味を、問い合わせし、文学の果たす意義を問い合わせることを意図している。この展観から私たちが多くを学ぶことを期待している。」とあります。

このご挨拶文に集約されているように、多様な作家の作品、初版本や原稿、書簡やその周辺資料が、企画展を支えており、また詩を中心に関連して紹介されているのも、今回の企画展の特徴と言えるでしょう。

多くの皆様の観覧をお待ち致しております。
死後、友人たちにより刊行の遺稿集「二十歳のエチュード」の元となつたノート。



原口 統二（1927～1946）
「エチュード」ノート

死後、友人たちにより刊行の遺稿集「二十歳のエチュード」の元となつたノート。

■■関連企画■■

○オープニングセレモニー

日時：2月11日(水) 午前10時～

○「文学・青春」展記念講演会

日時：2月11日(水) 午後1時30分～

講師：中村 稔氏（詩人・日本近代文学館理事長・全国文学館協議会会長）

場所：文学館ホール
定員：100名(FAX又は葉書でお申込みください。先着順)
☆入場無料

○文学館「朗読の会」

日時：2月21日(土)

場所：文学館ホール
定員：100名（当日先着順）
☆入場無料

○ギャラリートーク

日時：2月28日(土)、3月6日(土)、3月20日(土)

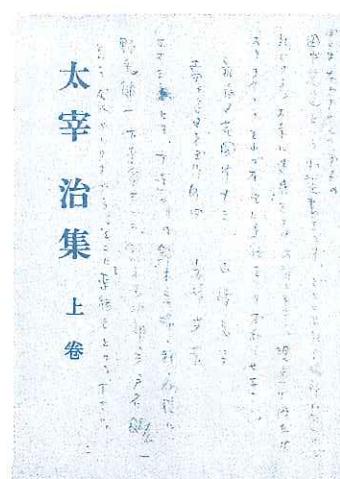
各日午後2時～3時

解説：展覧会担当学芸員

◇入場には観覧券が必要です。

■■主な展示資料■■

川端 康成 「伊豆の踊子」他三篇について 原稿
三島由紀夫 猪熊弦一郎画「仮面の告白」扇絵原画
田宮 虎彦 「絵本」原稿
清岡 卓行 「アカシヤの大連」冒頭原稿
田中 英光 「太宰治集」に書かれた遺書
中原 中也 長谷川泰子宛書簡 昭和8年7月
高見 順 一中同級生の寄せ書き（扇）
など400点



『太宰治集』に書かれた田中英光の遺書



石坂洋次郎『若い人』

改造社 1937年2月(前編)、12月(後編)

北国港町のミッション・スクールで、二人の若い男女の教師と女生徒との間で繋り広げられる自由と愛の物語。純粋な情熱で青春の理想を求める若者たちの姿が鮮やかに描かれている。

私が最初に怪談に筆をつけたのは、大正七年であった。それは『魚の妖・蟲の怪』と云う、中央公論に載せたもので、『岩魚の怪』と『蠅供養』の二つからなつてゐた。

ところで、幸か不幸か、其の怪談の評
判がよかつたので、彼方此方から怪談を
頼まれるやうになつて、長い間怪談ばかり
書いた。それは私が支那の怪談が好き
で、晉唐小説六十種、剪燈新話、聊齋志
異などと云ふやうな物を手あたりしだい
に読んでゐた關係から、怪談に特殊な興
味を覚えてゐたことも原因してゐるので
あろう。



浦戸湾から仁井田を臨む

田中貢太郎（一八八〇—一九四一・高知市
仁井田生まれ）といえど、「チクと一杯」と、
亡くなる三日前、親友に吐露した「なん
ちやあじやなかつたのう」の二つのセリフ
が思い浮かぶ。そして作品は明治初期政界
の裏話「旋風時代」（昭和四年六月から大阪
日日新聞、東京日日新聞に五一八回連載）。
山内容堂、中江兆民らが登場する長大なノ
ンフィクションノベルである。

出書房・昭和六十二年)――。
× × ×

太郎 新潮社】他▼吉田光子・「句集) 海の里 吉田舟一郎 吉田光子」▼山本和三郎「和紙と土佐っぽい中国の話 富士秋平 木耳社」▼小谷貞広・「(歌集) うたかた 小谷貞広 中央書房」▼猪野睦「猪野睦 詩集・ノモンハン桜 猪野睦 ふたば工房」▼中平清・「私の博物誌 3 中平清著刊」▼松浦道恵・「英詩と映像」

小説、史伝、実録のから俳句まで幅広い領域を誇った「総合文芸の雄」貢太郎の著書五十余巻の内、怪異恐怖譚ものがかなりの割合を占めているのに驚く。貢太郎の本領發揮はこのジャンルではないかと思えるほどだ。事実貢太郎は「怪談は人間のいろんな気持ちが集まつちよる。文学の究極じや」と言っている。

あやかしの世界へののめりこみは、少年時、郷里の儒学者西川穀雨、上京後に出会った東川揚舟（支那法制史の權威）から吸収した漢籍の知識が大いにあつたようだ。「聊齋志異」等を粉本として生みだされた形大な怪異譚はいつの時代でも通用する秀作揃い。ちなみに「日本の怪談」（昭和九年：改造社）所収の「竈の中の顔」など、文学性十分の傑作である。竈の中からにゅううとでてくる人間の顔、仮壇の中の生首、眼をギラつかせる仏像……、謎めいた坊主を追つた妖気ただようこの短編は、なぜその現象が起るのか説明はいつさい省かれ、不可能なことが不可解なまま淡々と描かれ、唐突に終わる。読む者は不合理な世界のた

小説、史伝、実録ものから俳句まで幅広い領域を誇った「総合文芸の雄」貢太郎の著書五十余巻の内、怪異恐怖譚ものがかなりの割合を占めているのに驚く。貢太郎の本領發揮はこのジャンルではないかと思えるほどだ。事実貢太郎は「怪談は人間のいろんな気持ちが集まつちよる。文学の究極じや」と言っている。

あやかしの世界へのめりこみは、少年時、郷里の儒学者西川穀雨、上京後に出会った東川揚舟（支那法制史の権威）から吸収した漢籍の知識が大いにあつたようだ。「聊齋志異」等を粉本として生みだされた膨大な怪異譚はいつの時代でも通用する秀作揃い。ちなみに「日本の怪談」（昭和九年・改造社）所収の「竈の中の顔」など、文学性十分の傑作である。竈の中からにゅうつとでてくる人間の顔、仮壇の中の生首、眼をギラつかせる仏像……、謎めいた坊主を

田岡嶺雲、幸徳秋水、奥宮健之らに世話をされたが、人徳というべきか、「野に放つた裸馬」（雨村）のような飲酒、無軌道な生活が続然に集まってきたのである。「田中部屋」と称されたほどだ。田岡典夫の自費出版本「しばてん」にいちいち紹介状を書くなど、めっぽう而倒見がよかつたのである。「旋風時代」の成功で懐があたたかくなつたのを機に貢太郎は月刊隨筆誌（博浪沙）を創刊、田岡典夫、添田知道らに文壇登場の道をひらく。

●高知市仁井田の生家には、貢太郎の妹豊喜の長男坂井弘七さん（87）夫婦が住んでいる。東側には八田中貢太郎先生誕生地の石碑がある。対岸の桂浜には、文学碑がある。

画 松浦暢編 アーツアンドクラフツ
▼市原麟一郎「土佐の民話38
3号 市原麟一郎編 土佐民話の会」他 ▶高知県歴史教育者協議会
「土佐の近・現代史を歩く 高知県
歴史教育者協議会編刊」 ▶林嗣夫・
「林嗣夫詩集成1袋 林嗣夫 ふ
たば工房」他 ▶小松弘愛・高知詩集
2003年 小松弘愛選 ふたば工房
▶松本紀郎・「秦の里・郷土史
雑談 松本紀郎著刊」 ▶茨木和生・
「定本 右城暮石全句集 右城暮石
邑書林」 ▶右城暮石（一八九九～
一九九五）は俳人で本名齊。明治三
十二年七月長岡郡木山村（木山村）
宇古田小字暮石生まれ。大正七（一
九一八）年大阪電灯会社（関西電
力）に入社。九年松瀬青々門の菅野

追つた妖気ただようこの短編は、なぜその現象が起るのか説明はいつさい省かれ、不可能なことが不可解なまま淡々と描かれ、唐突に終わる。読む者は不合理な世界のただ中に投げこまれ、戦慄する。モーパッサ

見どころ＝●高知新港
●種崎千松公園
●海水浴場

如雨露指導の社内俳句会に出席、これを契機に松瀬吉々主宰誌「倦鳥」へ入会、俳句の道に入りました。暮石は「倦鳥」を主な舞台として活動、若手作家としての地歩を固めて

筆者国則三雄志氏は、さる十一月二十四日に急逝されました。

門の安永房子と職場結婚大阪に新居を構えます。十二年一月師松瀬青々

りも、甚だ現代的なのである。

これまでの多大なご協力に感謝し、
謹んでご冥福をお祈りいたします。

死去。十三年十月奈良県富雄村に転居。二十一年五月には創刊された「風」に同人として参加するなど活

資料受贈報告

十五年九月（十一月）

敬
業
論

◆◆◆ 文學館日誌 2003年9月～2003年11月 ◆◆◆

A black and white photograph showing a group of approximately ten people, mostly women, gathered around a long table covered with a white cloth. They are looking down at the table, which has several books and pens on it. The setting appears to be a public event or book fair, with a large window visible in the background.

快く著書へのサインに応じる太田治子氏。
10／4 文学館ロビーにて

◆ 6日 かみしばい研究会。参加者8名。

◆ 11日 今川英子氏ご来館。◆ 12日 今川英子氏ご来館。◆ 13日 専門講座「太町桂月人と文学」酒と旅を愛した文人――講師：高橋正氏。参加者40名。◆ 14日 「林美子展」開幕。10月19日まで。／記念講演会「林美子・バリの恋」講師：今川英子氏。午後2時。文学館ホールにて。参加者10名。／林美子肉声を聞く会。文学館ホール。参加者30名。／ギャラリートーク引率2名観覧。◆ 21日 第42回朗読の会「花のいのちは――林美子」。午後2時。午後4時。文学館ホールにて。参加者40名。／田宮兵衛氏ご来館。◆ 25日 林美美子内声を開く会。文学館ホール。参加者30名。◆ 26日 高知市立養護学校生徒13名、引率4名観覧。◆ 27日 林美子肉声を聞く会。文学館ホール。参加者30名。◆ 28日 小西義昭・昌代様ご来館。

10月

◆ 2日 まんが記念館館長下岡氏外1名ご来館。／山田まさ子氏ご来館。◆ 3日 徳島県池田町郷土史会15名観覧。◆ 4日 記念講演会「林美子さんの大きな愛」講師：太田治子氏。午後2時。文学館ホールにて。参加者180名。長野県角間温泉林美美子文学館長黒鳥正人氏ご夫婦来館。

早く著書へのサインに応じる太田治子氏。
10/4 文学館ロビーにて





11/14 グリム童話展 開幕式

【朗読コンクール審査結果（敬啟略）】

●金賞・高知市立潮江東小学校5年・藤村美幸、●銀賞（2人）・葉山村立白石小学校4年・久岡志帆、須崎市立須崎中学校2年・倉橋望、●銅賞（5人）・高知大学教育学部附属小学校3年・池田佑典、宿毛市立母島小学校3年・澤近美優、窪町立若井川小学校2年・吉岡拓海、高知市立潮江東小学校5年・中越みづき、高知大学教育学部附属中学校3年・濱中愛里、●郷土文学賞・土佐女子中学校3年・土居千花、●審査員特別賞・本山町立本山中学校1年・杉本智子

◆19日 高知南中学校生徒13名、引率1名観覧。◆20日 高知聾学校生徒6名、引率2名観覧。◆21日 高知北高校生徒17名、引率3名観覧。◆22日 第6回文学カレッジ（2回目）【大原富枝と宮尾登美子の女性像】講師・山川楨彥氏。受講者110名。

◆23日 「えほんのじかん」グリム童話絵本のよみきかせ。期間毎週曜日（11／30除く）午後3時～午後3時30分。よみきかせは、青山章子さん、東真由美さん。2階ロビーにて。参加者36名。◆26日 高知市教育研究所生徒7名、引率5名観覧。◆27日 第四小学校生徒3名、引率3名観覧。◆28日 記念講演会「グリム童話の世界」講師・小澤俊夫氏（昔話研究者）。午後1時30分～午後3時。文学館ホールにて。参加者15名。◆29日 第6回児童生徒文学作品朗説コンクール県審査出場者22名。記念講演会「ウルトラパパの絵本と子育て」講師・宮内達也氏（絵本作家）、表彰式及び講評。文学館ホールにて。参加者120名。



『定本 右城暮石全句集』

十九年「関西電力」を定年退職。同年十一月創設された「朝日新聞大和俳壇」の選者となり平成四（一九九二）年四月まで務めました。三十一年四月「筐」を「運河」に改題し暮年の主宰誌とします。三十四年第一句集『声と声』を出版。三十九年二月には第五回「スバル賞」を受賞。四十五年第二句集『上下』を出版。翌年句集『上下』とこれまでの全業績が評価され第五回「蛇笏賞」を受賞しました。八十歳を超えて第三句集『蛇笏』から第六句集『散歩園』などを相次いで出版。平成二年には「運河」名誉主宰となり、四年四月本山町古田に帰郷。七年八月脳梗塞のため死去しました。九十六歳。

一年祭に『右城暮石全句集』が刊行されましたが出版部数が少なかつたこともあり絶版となつて久しく、このたび「運河六百号」を記念して「五十音順初句索引」「季題別索引」を付し未収録の句を補つて『定本右城暮石全句集』として再度刊行されました。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いたしました。厚くお礼を申し上げます。

高知県立文学館カレンダー

2004年
1～3月

1月—January

2月—February

3月—March

講座等

文学カレッジ

- [平成15年度文学カレッジ]** いずれも13:30～15:00まで、文学館ホールで ※募集は終了しました。
- ◇4回目・1/31(土) 「京極為兼の文学観」 講師…生田 勝彦氏(前高知女子大学教授)
 - ◇5回目・2/14(土) 「詩人 島崎晴海の生涯」 講師…清水 峯雄氏(詩人)
 - ◇6回目・3/13(土) 「寺田寅彦の回想作品」 講師…沢 英彦氏(詩人・文芸評論家)

良寛展

—詩と書とその生涯—
2004年1月2日(金)～
2月1日(日)

展覧会では、良寛の詩歌や書、書簡、良寛を慕った日本画家・安田叡彦の絵画や追慕者の後の作品により良寛の軌跡を紹介いたします。

企画展示室

記念講演会

日時：2004年1月10日(土)
14:00～15:30
講師：加藤 健一氏
(新潟大学名誉教授)
要申し込み／詳細は文学館までお問い合わせください。

「文学・青春展」 2/11(水)～3/21(日)

関連企画

- オープニングセレモニー
日時：2月11日(水)午前10時～
「文学・青春」展記念講演会
日時：2月11日(水)午後1時30分～
講師：中村 稔氏
(詩人・日本近代文学館理事長
全国文学館協議会会長)
定員：100名(FAX又は葉書でお申
込みください。先着順)
☆入場無料
文学館「朗読の会」～文学・青春～
日時：2月21日(土)
定員：100名(当日先着順)
☆入場無料
ギャラリートーク
日時：2月28日(土)、3月6日(土)、
3月20日(土)
各日午後2時～3時
解説：展覧会担当学芸員
◇入場には観覧券が必要です。

主な展示資料

- | | |
|-------|--------------------|
| 川端 康成 | 「伊豆の踊り子」他三篇について原稿 |
| 遠藤 周作 | 「白い人」原稿 |
| 三島由紀夫 | 猪熊弦一郎画「仮面の告白」屏絵原画 |
| 田宮 虎彦 | 「絵本」原稿 |
| 清岡 卓行 | 「アカシヤの大連」冒頭原稿 |
| 田中 英光 | 「太宰治集」の表紙に書かれた英光遺書 |
| 中原 中也 | 長谷川泰子宛書簡
昭和8年7月 |
| 高見 順 | 一中同級生の寄せ書き(扇) |
- など400点

★平成16年度の予定★

- 夏 「マザーグースの世界展」
- 秋 「川端康成 文豪が愛した美の世界展」
- 〔ミニ企画〕「すてきな絵本の世界展 コールデコット賞受賞作品を中心に」
- 冬 「『平家物語』完結記念 宮尾登美子展」

【休館日】1月—1, 5, 13, 19, 26日 2月—2, 9, 16, 23日 3月—1, 8, 15, 22, 29日

次回ミニ企画展紹介 岡田憲佳写真展「金子みすゞ思い花」

2004年4月10日(土)～5月30日(日)

詩人・金子みすゞの作品に登場する愛らしい花々の写真をご紹介します。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料 一般350円

特別企画展のあるときは、料金が変わります。(一般550円)
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.jp
http://www2.net-kochi.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850